

月報

<441号>

ケルン・ボン日本語
キリスト教会

二〇一八年六月二十四日発行

『分水嶺』

佐々木 良子

「時を忘れて没頭する想像力と冒険心を育むエンターテインメント・想像すれば、できるんだ! 探しいいこう。あたしの願う世界を」インターネット上で目に留まったキャッチフレーズです。最近日本で話題になっている? アニメの宣伝でした。

ボジティブで心へ訴へる言葉の出会いでしたが、信者は自分が頑張って願う世界を探し出すのではなく、私たちの思いや願い、心の叫びを聞いてくださるお方に向かって求めることができ、応えてくださる方がいつも共におられる、ということを知っているということは何と幸いなことかと、改めて思わされました。

現在、私たちの教会は分水嶺に立たされていると、いってよいと思います。昨年从今年にかけて、教会員の方々の引越し、更に来年は転勤予定のご家族もおられます。このようなことは海外邦人教会の常ではあります。一抹の寂しさと共に、ついついこれからの教会の行く末を心配してしまい、信仰はどこに行っただろうかと思わねる時があります。しかし、このような時だからこそ主に信頼し期待し祈り求めることの大切さを教えられ、同時に訓練の時が与えられています。

旧約の時代、イスラエルの民はモーセの指導によってエジプトを脱出しましたが、その後、四〇年に亘って荒れ野を彷徨う事になりました。厳しく長い旅路の中で食物に困り、苦しみの中から不平不満は募り反抗するばかりでした。

しかし、神は深い憐れみをもって、空からウズラを落とし、砂漠にはマナを降らせてくださいました。このような苦難の中、神は見放す事なく、恵みを持って日々の糧は必要な分だけ与えてくださいました。が、イスラエルの民は度々モーセや彼の兄弟アロンに向かって「こんなにもじい思いをするなら、たとえ奴隷の苦役を強いられなくても、エジプトに留まった方がよかったのに」と呟きました。(出エジプト記一六章、民数記一章)

エジプトには豊富な食べ物がありませんが、自由はありませんでした。砂漠には食べ物はありますが、自由はありません。人は目の前の事柄に満たされていなくて、不平不満を口に始め、つばやきが伝染していきます。現代の私たちもイスラエルの民の如くに、あれが足りない、今の状況が悪い、と呟きます。そして人生はそんなものだ、と諦めた息をつきながら過ごしている人が多くおられます。

「何よりもまず、神の国とその義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えらるる。」(マタイによる福音書六章三三節)「目に見える物を求める前にまず神の国とその義を求めなさい」と主イエスは仰せられます。具体的に言うならば、神の御言葉です。神の御言葉を求め、その御言葉を本気で信じるなら、生活に必要な知恵、物質等全てを神が与えてくださる、という事です。

人間は神の似姿として創造されたので、他の動物とは違う存在だから、生きる為に食べ物だけでは足りないから、ブラス神の御言葉が必要という事ではありません。神の御言葉を聞きつつ、内面的なものが整えられるならば、必要な物は後から全て備えられていた、という事を気づきながら、感謝して生きていくのが本来の歩みです。

本質を求める事をしないで、加えて与えられる物ばかりに目を留め易い私たちです。神はイスラエルの民が呟き、反抗しても、先だって日々の糧を与えてくださいました。物事の順番を間違える事なく、どのような時にも私たちを見放さず、寄り添ってくださる神を先ず求めていきたいものです。困難な状況の中にある私たちの教会ですが、いかに真剣に神の御言葉を聞き続けていくかという事が問われていると思います。

「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」(申命記八章三節)「この御言葉を心に留めつつ」私は神の御言葉を本気で信じているから、全てが与えられて、このような状況でも希望の中を歩んでいます」と、神の真実を身を持って体験させて頂いている事を証していただくが、教会の成長へと繋がっていくと信じています。昨年教会は四十周年記念の時を持ちました。これから更にどのような歴史を刻んでいくのでしょつか。本質から逸れることなく、主に期待しながら希望の道を歩んでいきたいものです。

金婚式を迎えて、再びドイツへ

東京若枝教会 宮崎美代子

私達夫婦とケルン・ボン日本語教会との関わりは、二十一年前、当時の小宮桂子さんの結婚式に出席させて頂いた事でした。

我が家の次男と桂子さんの妹さんが同じ幼稚園に入り、教会学校にお誘いをし、家族ぐるみのお付き合いが、始まりました。

私は、福島県白河市出身で、家の近くで、スウエーデン・ホーリネス教団の宣教師が伝道活動をされていた中学二年生の時に、教会学校へ行ったのが今日ある信仰生活の第一歩でした。

主人とは、日本イエス・キリスト教団荻窪栄光教会で、牧師を通して知り合い、五十一年前、結婚式をあげました。当時の私達は貧しくて、生活は大変でしたが、開拓伝道に強い志を持っておられた牧師ご夫妻と共に、心一つとなり、二十人の兄弟姉妹と共に西武線沿線の武蔵関駅の近くで開拓伝道への働きに加わりました。

私達には二人の息子が与えられ、次男が四歳に成った頃から、夫が海外へ単身で赴く様になりました。

教会は借家での開拓伝道時代から新会堂建築へと教勢も祝され、私達も会堂の近くに住居を移したことでした。そして、更に大きい会堂へと四回の会堂建築の業に加わり、住まいも三回移り、教会の発展と共に歩んできました。

夫の出張中も、私は子育てと成長期の教会の奉仕に無我夢中で過ごしました。若い時にへびさきを負つ(哀歌三・二七)喜びと訓練を受けましたが、一方では、父親不在の息子達には、母親として至らないことが多くあり、淋しい思いをさせてしまいました。しかし、天に宝を積む(マタイ六・二十)という一端を担うことが出来た事は、現在に至るまでの私の人生は豊かに祝され

ました。夫が退職後、O・Bの一人の方からの紹介で、ドイツ、ライン川沿いにある、とあるお城の管理のボランティアで、二〇〇六年から六年間の滞在で、出入りをする機会が与えられました。聖日は、二百キロ先のケルン・ボン日本語教会での礼拝に、朝八時に車で城を出て駅前に駐車し、ローカル線を乗り継ぎ、乗り換え、地下鉄、バスを利用して出掛けたものでした。礼拝、その後のお交わりの楽しい一時も帰途の時間の都合で中座して、駆け足でバスに乗り込み、電車の時刻にはらはらしながら、お城へ帰り着くのは二十時、二十一時頃になりましたが、この聖日礼拝とお交わりが、私達のお城滞在中の大きな励み、励まし、そして力となりました。

この四月、一年遅れの金婚式のお祝いに、長男が航空券を手配してくれて、四月四日から十九日迄、四年半振りに懐かしいライン川沿いの風景と街々、ご無沙汰をしている親しい方々を訪ねる事も実現出来ました。フランクフルトでは、桂子ピシヨップさん、聖歌さん、ウヴェさんご一家にお世話になり、そして、デュセルドルフでは、藤井さんのお宅に数日滞在させて戴き、人方ならぬお世話を受け、ゆったりとした時間の流れの中でお交わりを深めさせて頂きました。共に礼拝を献げる事も出来まして感謝でした。その後のお交わりも時間を気にすることなく最後まで楽しい時を共有出来ました。

私達は、お城滞在中の出来事として、五十数年、日本宣教に御身を捧げられたホッテンバッハ先生ご夫妻との出会いが与えられました。ご夫妻は引退後、ソーリングンにある教団の引退施設に住んで居られ、今回藤井さんご夫妻のご厚意によりお訪ねすることが出来再会の喜びと感謝に心は満ち溢れました。

結婚当初は、何も持ち合わせの無かった私達は、信仰を持って踏み出した一歩によって、神様の恵みの数々に圧倒され、夫は二十数年間の国内外の出張でし

たが、金婚式を無事に迎えることが出来ました。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。

主の良くてくださったことを何一つ忘れるな。

あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、

あなたの一生を良いもので満たされる。

あなたの若さは、わしのように、

新しくなる。(詩編一〇三編抜粋)

四年半振りのケルン・ボン日本語教会

新松戸幸谷教会 宮崎勇

久振りに、昨四月八日、御教会での主日礼拝に出席させて頂きました。佐々木良子先生に、直接のご挨拶が出来た日でもありました。今回は、私達夫婦の一年遅れの金婚旅行中の最初の主日礼拝になりました。

想い起こせば、御教会との触れ合いは、二十一年前の一九九七年迄遡ります。U兄弟姉妹の結婚式に参列をした事が契機です。特に姉妹とは幼児期、家庭集會からのお付き合いという事で、主が備えられた跡追いでのかすしさを憶える者です。

一方、私は、一九七六年から七七年に掛けて丸々一年、当時のチエコスロバキアへ、ポリプロピレン工場建設での制御装置システム納入での技術指導で出掛けました。この時、あらゆる物資不足の当該国から、食料品を始め豊かな工業製品を求めて、厳しい国境管理の中を西ドイツへ調達の為の入出国を繰り返した事でした。そうした中で、資本主義社会の豊かさ、わけても西ドイツの豊かな環境、決められた時間から時間の中でのゆったりとした生活、何よりも信仰の自由が保障されている喜び、願わくは、西ドイツでの生活を経験したいとの強い願望を抱かされた事でした。帰国後も中近東、アフリカ、アジア等々の諸国へ

の出張が連続する中で、西ドイツで起こされた願望は、消えるどころか、益々膨らむばかりでした。

そうした中で、ケルンでの結婚式を通して、丁度二十年振りに、西ドイツならぬ統一ドイツを訪ねる機会が備えられて、喜びに満ち溢れた事でした。この機に、私の長い出張、転勤の間、留守を守ってくれた家内を、チエコスロバキアならぬ分離したチエコ入案内をし、一週間、レンタカーで、かって滞在した工場、生活をしながら、周辺の街々を巡り、その間、当時お世話になった方々との交友を温めた後、新生ドイツの地を感じを持って踏みしめました。でも、これは、かって抱いた願望、抱き続けた願望ではありません。何故か、喜びの事としての結婚式への為の一時的な滞在でしかなく、生活、根を下ろしての願望での実現ではないからです。このことから願望を夢と置き換えるなら、夢から醒めないようにと夢を見続けるのでした。それから丁度三十年後の二〇〇六年、チエコスロバキアで抱いた願望、夢が実現しました。御教会の何人かの兄弟姉妹方は、この事の事実をご存知ですが、くすしい神様のお計らいについてはまたの機会にでも、お証しをさせて頂けたらと思います。

短期間での出入りではあるものの、話は前後しますが、二十一年前、初めてお伺いをさせて頂いた時から途切れ途切れのお交わりの継続ながら、その間、牧会をご担当された牧師ご家族とのお交わりは、現在の佐々木良子先生に至るまで、お会い出来なかつた教職の方はなく、時間的な長短はあっても切れ目が無いという不思議さも与えられています。

思いますに、ドイツのケルンの地にある御教会の存在を通してでなければ、日本の方、日本との関わりのある方、様々な使命での出入り、繋がりを通してでなければ、それぞれの形が出来なかつたであろうこの思いをするときに、ケルン・ボン日本語教会の四十年間の存在の大きさを称えずには居られません。その間の

想像にも出来ない、数えきれない数々のご苦労、ご奉仕とお祈り、そうした中でのイエス様の十字架を通しての救い、喜びで満ち溢れる恵みを感じつつ、主のおいでなされる日待ち望みつつ、更なる継続した業が進められることの祈りの輪の中の一人に加えさせて頂きます。

「本帰国して、今・・・」

尾畑 秀治

早いもので昨年一二月下旬に本帰国してから五ヶ月が過ぎました。四一年間のドイツ滞在中で揃えた品々や書類の量は思いのほか多く、各所への手続きなども合わせ、帰国を計画してから半年以上の準備を費やしました。その品々には「ケルンボン日本語キリスト教会」と関わりのあるものが多く、整理をする間にも手を休め、一つひとつの思い出や経験を思い起こしました。この拙文もそれらの中から僅かなものを記すことになってしまいました。

初めてケルンボン教会の礼拝に出席したのは、すでに「ケルン・ボン日本人キリスト教会」と名称を変え、リッペンタール自由福音教会を使用させて頂いた頃でした。教会は織田牧師が着任されて間もない黎明期でした。今でも小さな集会所に主日ごと椅子を並べ礼拝を守っていた情景を思い出します。もう三八年前のことですが、当時の月報などに目が留まると、多くの方々との出会いがここから始まったのだと感謝せずには出来ません。毎週の礼拝出席によって、教会の皆さんと主の恵みを分かち合い、楽しい礼拝後の交わりを持つことよって、長いドイツ生活が支えられたと確信しています。日本の各地域から渡独される兄弟姉妹とケルンボン教会で出会う訳ですから、日本では味わえない貴重な交わりと教会生活でした。

ケルンボン教会は牧師が定期的に交代する教会です。その度に新しい先生をお迎えし、先生との交わりが深

まった頃にはお別れしなければなりません。私自身も八名の先生方と教会生活をさせて頂き、この未熟な信徒が役員にまで任命され、何が出来るか模索しながら信仰生活を送って来ました。毎週の礼拝に出席し主を誉め称えること、日本語のメッセージを通して自らを省みることに、一週間の歩みを終えて主の教会に戻り着けることに、ケルンボン教会の大切さを覚えしました。教会生活の中では困難な問題も生じ、その解決の糸口さえ見出せないこともありましたが、主は教会の歩む道を常に備え祝福して下さったことを、過ぎ去った今になって思い起こしています。

ヨーロッパに在する一教会として、「ヨーロッパキリスト者の集い」の開催を三度も経験させて頂きました。小さな教会が主催するのは大変な作業ですが、教会全体が共に祈りつつ、教会員が一つになって主の用に用いられたことは、教会自体を豊かにする大きな賜物でした。今でもイザローンの農牧地の施設、ムッツのスポーツホテル、ゲゼケの広い集会施設が、それぞれの時代の象徴として目の前に浮かんできます。手元に分級をする子供たちの元気な顔や集合写真がありますが、きつこの子供たちの中からキリストを主と告白する人達が与えられたに違いないと信じています。

月報の制作にも二〇数年携わりました。毎月発送していた月報の作成は、完成するとすぐ次号を書き始めるといった繰り返して、次号への取り掛かりは正直なところ厳しく、長く手書きで作成していましたので、書いた字を見てはその統一性のなさに恥ずかしい思いになりました。そしてワープロからコンピュータの時代に移り、字は画一化され作成しやすく読みやすくなりましたが、指に力を入れ肩が凝っても書き続けた頃を懐かしく思い出します。我儘とは知りながら原稿をお願いし快く書いて下さった方々に、このような紙面からですが、感謝の気持ちを伝え出来ればと思

っています。五年ほど前からその役目も引き継いで頂き、月報を読む度に奉仕の大変さを思い感謝して

「ケルン・ボン日本語キリスト教会」と名称が変わり、礼拝場所も現在のボン・ヘッファー教会に移って一〇年ほど経った頃、ボン・ヘッファー教会の創立記念礼拝があり当教会も出席しました。礼拝の中で故ヒュネケ牧師が「ケルンボン教会をこのボン・ヘッファー教会のゲスト教会に迎え交わりを持っていきます。」と紹介され、そのあと一斉に会堂から拍手が起りました。ドイツ教会の方々と親しく交わってきた数年の内に、私達の教会を快く理解して下さったと、とても嬉しく胸一杯になりました。現在も我が家のように自由に日曜日の午後を味わわせて頂いていますが、ドイツ教会の温かい思いやりの対応に、何度も頭の下がる思いをしてみました。

長いドイツでの教会生活では悲しいお別れもありました。共に礼拝を守り交わった方々が天国に召されるほど悲しいことはありませんでした。私達夫婦を支えて下さった方、いつも元気に笑顔で話していた方、若くして突然の別れとなった方。そのような経験が与えられ、主のみ言葉通りにすべてが神の御手の中にある、すべてに良きとされる時のある事を学ばされました。思い起こすと本当に多くことを、ケルンボン教会に在って経験し歩んできたように思います。

現在、私達夫婦は東京で息子家族と共に、三人の孫たちに囲まれ生活をしています。四一年前にドイツへ出発した時と同じ土地に戻った私達は、旧知の方々と再会し、そして母教会の「日本長老教会・東大和刈穂キリスト教会」に通って礼拝を守っています。イースターや聖霊降臨日の礼拝では聖歌隊の指揮や妻(真知子)の讚美をもって奉仕をさせて頂いています。音楽を通して主に用いられる時、ケルン旧市街の聖マルティン大教会で歌った合唱讚美や、皆さんの歌う顔がい

つも目に浮かんできます。創立四〇年を迎えたケルンボン教会、いつまでもみ言葉が泉のように湧き出し、川の流れが枯れることのないように、これからもずっと主の福音が宣べ伝えられますように祈っています。「この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」(使徒言行録一八：一〇)と聖書は書き記しています。長きに亘り私達家族を励まし支えて下さった皆さまに、今一度お礼を申し上げます。そして主の御守りが皆様にもありますようにお祈りしています。

◇ 報 告 ◇

◇ 佐々木牧師・日本での宣教報告 三月一日～三〇日 今年も多くの教会が愛溢れる準備をもって招いてくださいました。日本基督教団の教会を中心に一〇カ所で主日説教や祈禱会のご用、ドイツでの宣教報告をさせて頂き、又、各所訪問させて頂きました。恵みのお証しと共に様々な祈りの課題を共有し祈ってください、そしてこれからも祈ってくださいということに励まされました。

◇ 創立四〇周年記念誌発行 昨年一月に四〇年を迎えたことを機に、歴史編纂とこれまでの歴代の主任牧師先生や関係する方々からのメッセージを冊子にまとめることができました。

◇ ボン・ヘッファー教会主催・水曜日の会出席 五月九日、カトリック教会と合同で様々な学びをしている会に招かれ、佐々木牧師、ドレーア京子姉、ブルーベ道路子姉が日本の教会に関してそれぞれの立場で発言し、活発な質疑応答がなされました。

◇ 野外礼拝 六月一〇日(日) 広島長崎公園 昨年同様に、若いご家族がたくさん参加してください、爽やかなお天気の下、楽しい恵みのひと時を過ごすことができました。感謝いたします。

◇ 送別礼拝 六月二日 ドレーア京子姉・ウルター兄は、七月末にハンブルグ近郊へ引っ越しされます。長きに亘り教会を支えてくださ

たことに心から感謝します。新地での更なる祝福をお祈りいたします。

◇ 新しい集会のご案内 六月二日から月一回、第四金曜日午前一〇時より牧師宅にて読書会が始まりました。

◇ 予 告 ◇

Strassenfest (教会通りのバザー) 七月一日(日) 一時一五分よりボン・ヘッファー教会との合同礼拝後、日本食コーナーを出店してバザーに参加します。今年の会場は Krieler Dörschen カトリック教会の周辺 (Suibert-Heimbach-Platz) になります。

第三五回欧州キリスト者のつどい 八月二日～五日 イギリス・エディンバラにてエディンバラ日本語教会の主催により行われます。

◇ 編集後記 ◇

住宅難のケルンでの住居探しは困難で、諦めかけていましたが、主が同じアパートの隣の部屋をご用意して下さい、七月一日に引っ越します。二部屋になったので、新居が更に多くの集会に用いられて伝道の拠点となりますようにお祈りお願いいたします。(佐々木良子牧師)

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会
Japanische Evangelische Gemeinde
Köln-Bonn e.V.
〈主日公同礼拝〉
会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche
住所: An der Decksteiner Mühle 1
50935 Köln (Lindenthal), Germany
電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)
時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00
〈牧師〉 佐々木良子 (Pfr. Ryoko SASAKI)
牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln
固定電話: 02234-9298792
携帯電話: 0151-2910 6278
Email: r310130s@yahoo.co.jp
〈ホームページ〉
http://koelnbonn.jp
〈振込口座〉
IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38
BIC: PBNKDEFF